

近森病院救命救急センター

センター長 根岸正敏

【診療体制】

近森病院救急部門は、2011年5月に高知県から救命救急センターに指定されましたが、救命救急センターとして三次救急といわれる重症患者さんの受入れを行うのは当然のことですが、中等症から軽症も含めて、救急車やヘリコプターで搬入される患者さんから、自力で受診される患者さん（walk in）まで、あらゆる状態の患者さんを受け入れる体制を継続しています。救急患者さんに対しては緊急度・重症度から優先順位を判断したうえで救急専従医師による迅速な診断と治療が行われます。そして初期診断・治療により患者さんの状態の安定化を図った後に、さらに各診療科専門医師に引き継がれ、高度な根本治療・その後の入院治療が行われます。（=いわゆる北米 ER 型救急システムと呼ばれており、当院では2002年からこの体制を導入し現在も継続しております。）なお、心肺蘇生後、多発外傷、低体温、熱中症、敗血症など重症感染症、破傷風などの特殊感染症、一般外傷などは、そのまま救急科での入院治療を行っています。

重症患者さんの入院を受入れる救命救急病床は18床あり、ほかに高規格のICU（集中治療室）16床、SCU（脳卒中専用病床）15床、HCU（高機能治療病床）24床、そして一般病棟とそれぞれ患者さんの状態に適した病棟での入院治療が行われます。入院病棟の決定は、患者さんの病状を十分に把握した上で、担当医師、ベッドコントロールナース¹（BCNS）、ER 外来リーダー医師、リーダー看護師との協議により決定しています。

救命救急病棟は、日勤帯は ER 医師が、また休日夜間帯は各診療科の応援も得て24時間専任医師が常駐する体制をとっています。また ICU、SCU、HCU にもそれぞれ24時間体制で担当医師が常駐しています。各診療科がオンコール体制をとり、特に、循環器科医師、脳卒中对応医師は24時間院内に待機しており、心血管疾患、脳卒中に迅速に対応することが可能です。このような体制の中で、2020年の救急車の受入数は、四国でもトップクラスの6,412件（図：1,2）でした。コロナ禍の影響による高知県全体の救急車出動件数の減少により、昨年より約400人の減少でした。Walk in 患者さんは16,826人で、こちらもコロナ禍による受診控えの影響により減少傾向でした。全体での入院は前年とほぼ同様に3,583件、心肺停止は122件でした。また、応需率に関しては、2019年は、1,2月で応需率がかなり低下してしまい、平均で90%でしたが、この理由として高齢者の肺炎などの感染症が多く、これに伴う入院期間の延長、ベッド不足などが考えられました。2020年は平均92%とやや改善しています（図：3,4）。不応需例に関して、その詳細を分析すると病床が確保困難、救急車受入れが多数重なる（ERの対応ベッドが満床）などが多くを占めました。その一方で麻酔科あるいは当該科の対応が困難な事例は減少し、各科の協力により緊急手術の重複にも対応可能となってきています（図：5）。

救急車受入れ要請では、総数は昨年とほぼ同様でした（図：6）。高知県全体での救急車出動件数はやや減少で、3つの救命救急センターへの搬送もやや減少傾向にありました。

患者さんの重症度別では、軽症（外来での処置、通院で可能）は約41%、中等症（手術や入院が必要であるが、一般病棟で対応可能）が約31%、重症（ICUなどの重症対応病床への入院を要する）が28%と全体的にはやや重症化の傾向がみられました。（図：7）。重篤患者さんの受け入れ数についても、中四国でもトップクラスとなっています。

ヘリ搬送（高知県 DR ヘリ、高知県防災ヘリなど）患者数は103件で約10件の減少でした

¹ 「ベッドコントロール」＝「病床管理」といわれる。空いているベッド数や退院予定患者数を把握し、スムーズな入退院を可能にするため、またより多くの患者さんに安全で質の

高い医療ケアを提供するための病床管理担当看護師を「ベッドコントロールナース」という。

が、ドクターカーの出動は40件から73件とほぼ倍増しました。へりは天候や時間に影響されるため、その分をドクターカーで補完できたものと考えております。疾患別ではともに循環器系疾患、外傷症例が多くなっています(図.8,9)。

救命救急センターの医師は根岸、井原、竹内、三木、矢崎、久、平野に加えて、総合診療部の浅羽、中山両医師の応援体制、さらに各診療科からの応援医師、研修医4~5名での診療体制をとっています。ほかに、walk-in対応の内科系医師2~3名とで、救急車やwalk-inのすべての救急患者に対応しています。再診処置のみの患者さんには、外科、形成外科、整形外科医師が午後から専門外来で対応する体制を維持しています。

全日勤帯、平日夜間には救急科医師がほぼ常駐し(休日夜間は内科による応援体制)、当直に不在の診療科については、各診療科ともに直ちに対応可能なオンコール体制をとり、24時間のバックアップ体制がとられています。

看護師は、町田 ER 看護師長、野瀬救命救急病棟師長を中心に、ER、救命救急病棟、放射線部門、手術部門の看護師など救急に精通したスタッフが一丸となって看護にあたっています。また手術部とも密な連携を取り、ERでの超緊急手術(ERでの緊急開頭、開腹術など)などにも迅速に対応できるようになっています。

また全国的にも先駆けとなった院内救急救命士は、数名の異動はありましたが、2020年は6名が勤務しており医師や看護師とともにドクターカーやへり搬送患者受入れを中心として活動し、さらに救急患者さんの初期対応の業務も行っています。来年度には現役の消防救急救命士、新卒と2名の増員を予定しています。

【教育】

ERスタッフを中心に、AHA(米国心臓協会)認定のBLS、ACLSコース、日本救急医学会認定のICLSコース、JMECC(日本内科学会認定内科救急・ICLS講習)やDMAT研修(災害医療)などの各講習会にもインストラクターとして積極的に参加しております。コロナ禍ということもあり、それぞれのガイドラインを遵守しての制限下での開催となりました。

高知大学、岡山大学、群馬大学、東京女子医科大学をはじめとする各地の大学からの医学生実習は、蜜を避けて十分な感染対策を講じた上での最小限の受け入れとなりました。ほかに救急救命士再教育、救急救命士養成施設からの学生、看護学生など多くの医療従事者の養成にも力を入れています。

【災害関係】

2010年に高知県から災害拠点病院に指定され、その役割を果たすために、近森病院の災害対策委員会、高知県および高知市の災害関係機関とも連携をとりながら、2020年も各種の災害訓練や講習会等に参加しています。

高知県DMAT研修、MCLS(多数傷病者対応)研修にも、スタッフや受講者として参加し、迫りくる南海トラフ地震への備えも行っています。

2020年は高知県でもコロナウイルス感染の蔓延により、医療事情は大きく変わりました。多くの医療機関で感染疑い患者さんの受け入れが制限される中、当院では発熱外来の開設をはじめ、ER救急外来でもほぼ制限することなく受け入れを行ってきました。日頃の感染対策への意識向上、感染対策講習受講や現場での実践を活かして対応した結果、幸いにも院内感染やクラスターの発生なく対応することができました。職員全体の感染対策に対する取り組み、そして搬送に携わる救急隊の皆様、患者・家族さんの協力の賜物であると、この場をお借りして心より感謝申し上げます。

当院の救命救急センターは2021年5月でセンター指定10年目を迎えます。今後も、私たちは患者さんに寄り添い、複雑・多様化する最新の医療技術なども積極的に取り入れ、高度で質の高い医療提供を通して、高知県の救急医療をリードする救命救急センターとしてさらに努力してまいります。

なお、2020年には、近森病院の救命救急センターの概要、活動状況などが、日本光電の『光電ニュース』、へるす出版発行の月刊誌『救急医学』に紹介されました。

統計資料

図1：年別の救急車搬入件数（1993年～2020年）

図2：2020年 月別救急車搬入件数

図3：2020年 月別救急車応需率

図4：2019/2020年 月別救急車応需率比較

図5：2020年 不応需症例の内訳

図6：2020年 救急車受け入れ要請件数 図7：2020年 救急車受け入れ患者重症度

図8：ドクターヘリ搬送受け入れ状況

図9：ドクターカー出動状況

図1 年別 救急車搬入件数

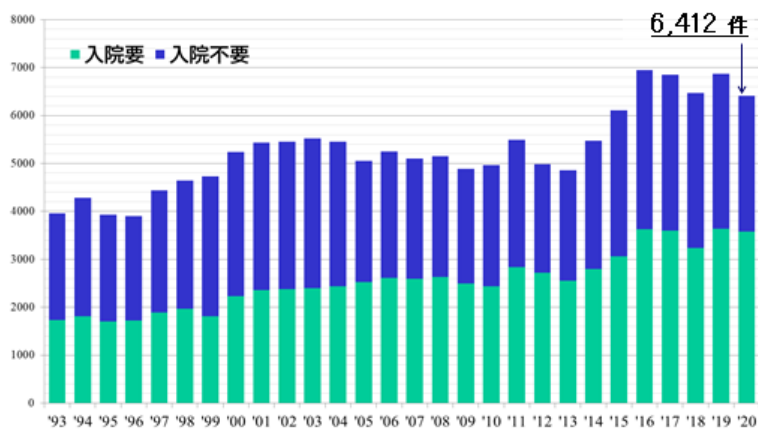


図2 2020年 月別救急搬入件数

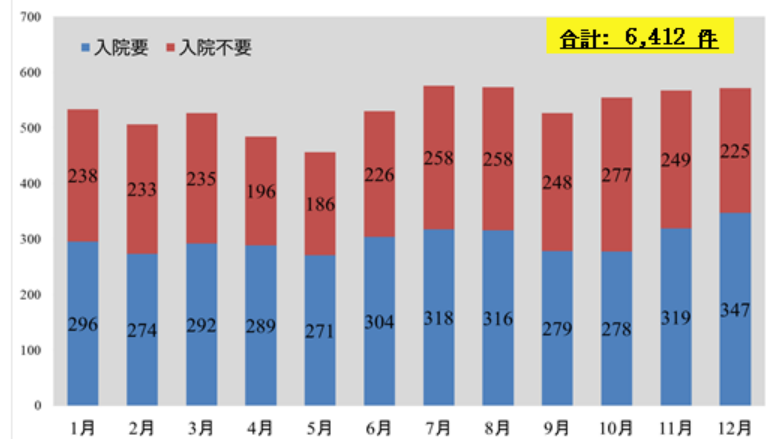


図3 2020年 月別救急車応需率

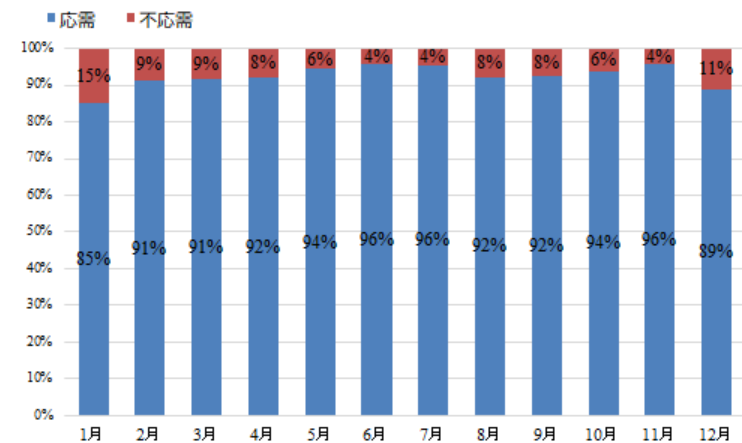


図4 2019年/2020年 月別救急車応需率比較

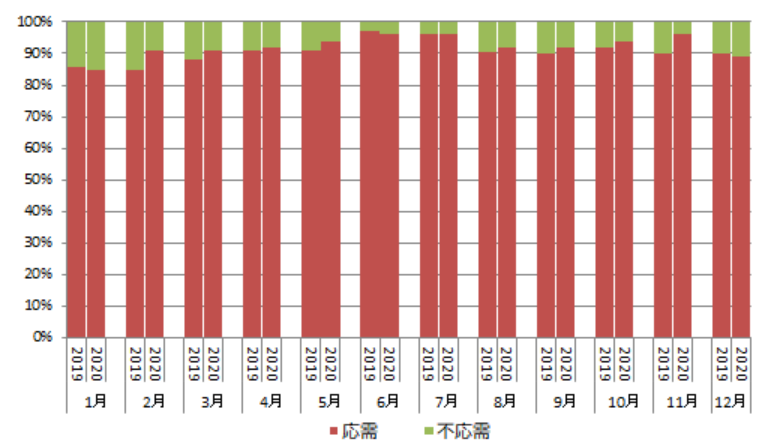


図5 2020年 不応需症例の内訳

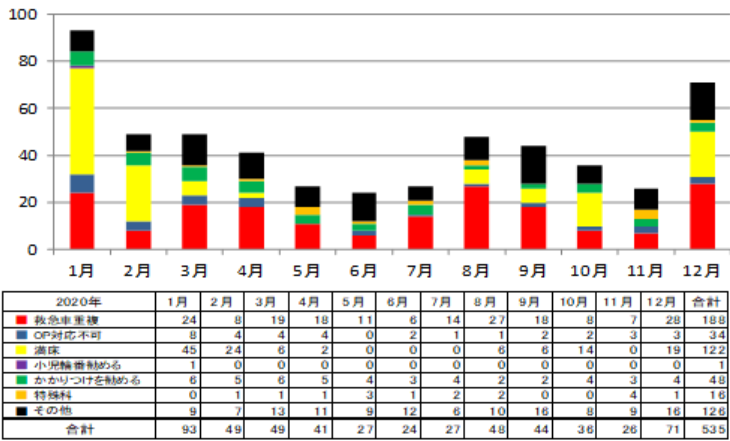


図6 2020年 救急車受入れ要請数

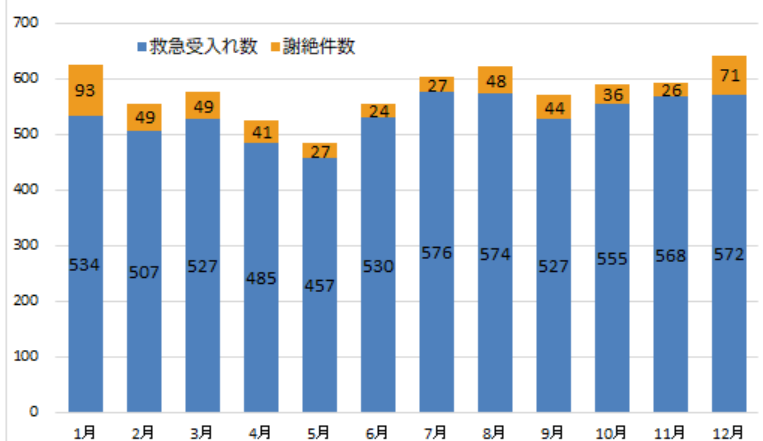


図7 2020年 救急車受入れ患者重症度

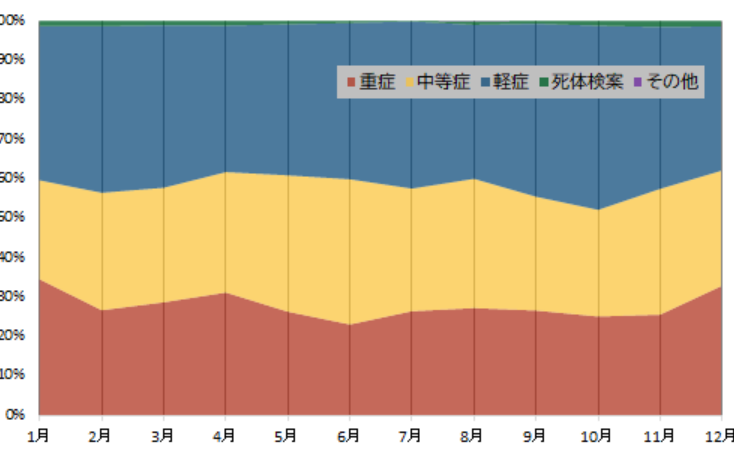


図8 2020年 ドクターヘリ搬送受入状況



図9 2020年 ドクターカー出動状況



学術発表・講演会等

論文発表・著書

タイトル	執筆者 共同執筆者	掲載誌 出版社	掲載誌 出版社
急性大動脈解離-ER での見逃し症例の検討	(救急科)矢崎知子、平野孝士、久雅行、三木俊史、竹内敦子、井原則之、根岸正敏 (麻酔科)古曾部和彦	高知県医師会医学雑誌 (高知県医師会)	第 25 巻 第 1 号
当院で勤務する救急救命士の院内業務活動の現状と課題	上總麻里子、根岸正敏	日本臨床救急医学会雑誌 (へるす出版)	Vol.23,No.2,2020 P139-145
抜去に難渋した園芸用支柱による経鼻腔穿通性脳損傷の 1 例	林悟、西本陽央、帆足裕、松岡賢樹、竹内敦子、三木俊史、根岸正敏	神経外傷 (一般社団法人 日本脳神経外傷学会)	43 巻 2 号 P.57-60

その他

タイトル	執筆者 共同研究者	掲載誌 出版社	掲載誌 出版社
光電救急ニュース 【連載第 12 回 各地の救命救急センター最前線】 近森病院救命救急センター	根岸正敏	光電救急ニュース No.55 (日本光電工業株式会社)	P.1-2 2020.1 発行
救急医学 【連載 救命救急センター紹介】 近森病院救命救急センター	根岸正敏	救急医学 12 月号 第 44 巻第 14 号 (通巻第 551 号) (へるす出版)	P.1981-1984 2020/12/10 発行